

## 届かぬ光

8月8日、東日本大震災で大きな被害を受けた陸前高田市では、名勝「高田松原」の松を使ったお盆の迎え火が行われました。

迎え火に使われた護摩木は、被災者が、大震災によって亡くなった方々に思いを寄せて様々なメッセージを書き込んだもので、読経の後点火され、夜空を赤く照らしました。

この護摩木は、当初、京都の伝統行事「五山送り火」で燃やされる予定でした。しかし、福島第一原発事故による放射能汚染を懸念する声が相次いだため中止され、結局、陸前高田に戻ってきたものです。

「五山送り火」を主催する大文字保存会の松原理事長は、「中止は苦渋の決断だった」と話しているとのことですが、これに対し市役所などに抗議が殺到しているようです。私も、今回、大文字保存会の取った対応は、非常に問題であるし、京都大好き人間としては残念に思っています。

「五山送り火」は、今や祇園祭と共に京都の夏を代表する風物詩の一つ、京都にとっては大事な観光資源となっていますので、陸前高田からのリクエストは、京都市民にとっては迷惑な事だったのかも知れません。しかし、送り火そのものは、ふたたび冥府にかえる精霊を送るという意味をもつ、宗教的行事として行われているものですので、陸前高田の方々が、死者の霊を慰めるために「五山送り火」で彼岸へと送り届けたいという思いは、私には理解できます。

福島第一原発の事故以来、風評被害が大きな問題になっていますが、今回の出来事はまさに根拠のない風評被害そのものといって良いでしょう。

当事者の中には「放射能汚染を恐れる気持ちをもつ人がいるのは致し方ない。」との声もあるようですが、京都市などの検査では放射性物質は検出されていないのですから、汚染を心配する声に対しても、そうした状況を良く説明して、理解を求める努力をすべきでした。

関係者がその努力を怠った理由は何かといえば、とどのつまり、東日本大震災も福島第一原発の事故も、彼らの意識の中では、対岸の火事よりも遙かに遠い出来事であり、亡くなった者の霊を「五山送り火」で送ってやりたいという被災者の切実な思いに寄り添うことができなかつた、というに過ぎません。

被害者の痛みを我が痛みとして共有できたなら、全く別の結論になったと思います。

人が人を思いやる気持ちがなければ、「五山の送り火」の燃えさかる輝きといえども、天まで届けることは難しいのではないかと考えています。そういう意味で、今回の出来事は、とても寂しく、残念でなりません。(塾頭 吉田 洋一)